

タイトル 「スナックのまぼろし」

著者 幹戸良太（みきどりようた）

あらすじ

父の葬儀を終えた永井洋二は実家で遺品整理をしていた時に、父のコートのポケットからくたびれたマッチ箱を見つける。マッチ箱には「スナックまぼろし」と書かれている。幼い頃から厳しい人だった父が通っていたお店に興味を抱いた洋二はマッチ箱に記載された住所を頼りに寂れた商店街を進む。

（本文文字数 4687文字）

精進落としての席で昔話に花を咲かせる親族の姿を目にし、なんとか喪主の役目は果たせたようだと言を下ろした。

「洋二君、お疲れ様。お父さんもきつと喜んでるよ」

記憶よりも随分年を取った親戚のおじさんがグラスにビールを注いでくれる。

「ありがとうございます」

バタバタした葬儀の準備でろくにご飯も食べていなかった。一口飲むと、苦味の液体がやけにしみた。

秋の紅葉が去り、本格的な冬が出だした頃、私の父は亡くなった。永井君雄。享年七十六歳。父を一言で表すと厳しい人だった。

父の父、つまり私の祖父が病で他界したのは、父が中学三年生の時だった。長男だった父は中学を卒業すると進学せず、椅子を作る小さな工場に就職し、家族を養った。

数年後、事務員として働き始めた母と知り合い、二人は結婚した。

父が三十歳の時に会社は倒産。同じ年に私は生まれた。その後は職を転々としながら、定年を迎えた。

苦労もあつたようだが、自分に厳しくが信条の父は弱音や愚痴を家族の前で一度も言わなかった。その信条の犠牲になったのが母と私であった。

父から褒められた記憶はなく、駆けっこで一番になっても、良い成績を取っても、もっと上を目指せ、このままで満足するな、と、子供の私にも一切容赦しなかった。

父の前では些細なことでも失敗してはいけないといつも張り詰めた空気が流れていた。幼い頃から、それが当たり前だった私は父との間に一定の距離を保ってきた。

そんなせいもあつてか、葬儀でも感情が込み上げてくることはなく、淡々と業務をこなしている自分を冷たい人間だと感じていた。

慌ただしかった葬儀を終え、妻と娘は東京へ戻り、私は一人実家に残って父の遺品を整理した。母は三年前に他界し、人の出入りがなくなった実家は、生まれ育った家にもかかわらず、他人の家に一人で残されたようどころか落ち着かない。

必要の無くなった衣類や本などを整理していると、クローゼットから父がよく着ていた茶色のコートが出てきた。ポケットの中を探ると何かが手に触れた。指先で探ると長方形の形をしていて、ジャリつとした感触が爪先に伝わった。手に取ると、くたびれたマツチ箱が出てきた。ひっくり返すと剥げかけた黒地の表面に白色のレトロなフォントで「スナックまぼろし」と書かれていた。

最寄駅の反対側に出ると、小さな商店街が現れた。寂れたシャッター通りに人の姿はなかった。寒さに肩をすくめながら歩を進める。静まり返った商店街に頼りない自分の足音が響く。次の角を右に曲がって路地に入るとシャッターの下りた建物に挟ま

れた小さなお店を見つけた。入口前には明かりの灯ったネオン看板が置いてあり、見つけたマツチ箱と同じ店名が書かれている。気になった私はマツチ箱の裏面に記載してある住所を頼りにここまで来ていた。とっくに閉店しているだろうと期待してなかったが、「スナックまぼろし」は営業していた。

扉を開けると、ベルが鳴った。

「いらっしやいませ」

カウンター内にいた女性が上品な笑顔を向ける。

「あつ、こんばんは」

店内にはカウンター席が八席、レンガ調の壁側には気持ちばかりの小さなテーブル席が二席。橙色の照明が店内を照らし、温もりを演出している。

「どうぞ、こちらへ」

カウンター内にいる女性に案内され、真ん中の席に座る。二席挟んだ奥の席では高齢の男女が焼酎の水割りを飲んでいる。

「何飲まれますか？」

「えっと：じゃあ、ビールで」

女性から受け取ったおしぼりで手を拭くと、冷えた指先から身体中にゆっくりと熱が伝わっていく。

「お疲れ様です」

出されたグラスに女性がビールを注いでくれる。

「いただきます」

一口飲む。うまい。

「お客さん、うちの店初めてですよね」

「えっ、あつ、はい」

「ありがとうございます。私、恵子です。よろしくね」

「あつ、洋二つて言います。よろしくお願いします」

恵子さんの急な自己紹介に釣られて名前で答えてしまった。恥ずかしさを隠すためにビールをもう一口飲む。

「ママ。氷のおかわり」

「はい」

恵子さんが奥の席で飲んでいた高齢の男女の元へ向かう。会話から二人が常連だと分かる。

スナックのママというと派手な服装をしたおしゃべり好きなおばさんというイメージがあったが、私よりも少し年上っぽい恵子さんは落ち着いた雰囲気を感じさせた。奥で飲んでいる恵子さんよりもだいたい年上の常連にママと呼ばれている姿がとてもしつくりくる。

「洋二さんはこちらの方？」

戻ってきた恵子さんが減ったグラスにビールを注いでくれる。自己紹介してすぐに名前で呼ばれ、なんだか急に距離が縮まった感じがする。

「はい。住まいは東京なんです、生まれはこつちです。ちょっと用事で里帰りをしている」

「今夜はなんでウチの店に来てくれたんですか？」

「えっ？」

「いや、一見さんが一人でいらっしやるなんて珍しいなと思って」

「えーっと…」

私は少し迷ったが、ポケットからマッチ箱を取り出した。

「実は父のコートのポケットにこれが入っていて…」

「わあ、懐かしい。これ、マスターがいた頃にお店で配ってたものですよ」

元はマスターが始めたお店で、恵子さんも働いていたが、故郷の母親の介護のため、マスターが引退し、一度店は閉店。常連さんの願いもあって、しばらくして恵子さんが店を復活させた。店名はマスターの頃から変えず、「スナックまぼろし」のままだと教えてくれた。

「洋二さんのお父様のお名前は？」

「君雄です。永井君雄って言うんですが…」

「えっ？ 永井さん？ 洋二君は永井さんの息子さん？」

「はい」

驚いた表情の恵子さんが急にさん付けから君呼びに変え、さらに距離が縮まった。「永井さん、マスターがいた頃からの古い常連さんですよ。その後、お元氣してらっしゃいますか？」

「あの…、実は亡くなったんです」

「えっ？」

「里帰りの理由はそれです」

「そうだったの…、ごめんなさい」

「いえ、気にしないでください」

恵子さんの悲しげな表情を見ると、なんだか悪いことをしてしまったような申し訳ない気持ちになる。

「親父ってどんな人でしたか？」

「そうね、とても頼りになる方だったわよ。永井さんはそんなに話す方ではなかったけど、聞き上手だったから、みんなよく相談してたわね」

「なあ、さつきから二人の会話を聞いてたんだが、永井さんの息子さんなのかい？」

奥にいた高齢の男女が私に向かって話しかけてきた。

「えっ、あつ、はい」

「そうか、永井さんの息子さんとは。こりや良い」

こりや良いの良いが何を指すのか考えているうちに、二人はあつという間に自分のグラスを持って席を詰めてきた。

「こちら、横さんと喜美さん。二人とも古くからの常連さんなの」

「まさか、永井さんの息子さんに会えるとはな」

「永井さんには色々お世話になったの。ありがとうね」

「あつ、いえ、私は何もしてないですから」

「なんだか不思議な巡り合わせね。せつかくだから乾杯しましょうよ。洋二君、おかわりビールでいい？」

「はい」

恵子さんが新しく出してくれた瓶ビールを喜美さんが注いでくれる。初めて来た店で、初めて会った父の飲み仲間とグラスを交わす。

「永井さんはここに来ると、必ず落陽を歌ってたな」

「そうそう、永井さんは大の拓郎ファンだったわね」

「珍しく永井さんが酔っぱらったことがあって、その時に広島弁で喋ってたのは、きっと拓郎の影響だな」

「そういうえば、私が店で飲み潰れた時、永井さんが背負って家まで連れて帰ってくれたこともあったわね。ママ、あの時はご迷惑おかけしました」

「そんなこともあったわね、懐かしい」

「思い出した。あの時、わしが永井さんをあんたの家まで案内して行ったんだ」

父との思い出話は尽きず、飲み過ぎてしまった私はトイレに入り、便座に座って少し休んだ。目を瞑ると頭がふわふわと揺れている。洗面台で顔を洗って、トイレから出ると、先ほどまで賑やかだった店内が静まり返っている。

「あれ？」

目を擦ってピントを合わせると、恵子さんたちの姿はなく、店内には霧のようなものが立ち込めている。よく見ると、カウンター席に見覚えのある後ろ姿がある。茶色のコートを着た父が座っていた。

酔っているせいか、その光景に驚かなかった。ふわふわした頭のまま、私は父の隣に座った。父はタバコを吸いながら、焼酎の水割りを飲んでいいる。灰皿の横にはハイライトと私が見つけたマッチ箱が置いてある。

父が私を見た。

「最後にもう一度来たいと思つてな。まさか、洋二がいたとは驚いた」

「みんな、いい人たちだな」

「ああ、古くからの仲間だよ」

「親父にあんな仲間がいたなんて、意外だったな。家で見せる親父の姿とは結びつかないからさ」

「俺は器用な人間じゃなかったからな」

「子供の頃、家にいる親父はなんていうか、近寄りがたくて怖かった」

「家族の前では、立派な父でいよう、お前や母さんにとって恥ずかしくない父でいよう、そればかりが父親の務めだと勘違いしていた」

「まあ親父っぽいけどな」

「もつと大切なことがあったが、俺はそれをしなかった。そのことをすごく後悔している」

父が焼酎の水割りを一口飲む。

「大切なこと？」

「お前や母さんと顔を合わせてたくさん話をする事だ」

父の言葉を聞きながら、私もビールを飲む。酔っているのになぜか飲みたいと思っ
た。

「じゃあさ、あっちに行ったら、母さんといっぱい話してあげてよ。母さんきつと喜ぶよ」

「ああ」

父がグラスを空にすると、タバコを消して立ち上がった。

「あまり時間がなくてな、そろそろ行かなきゃならん」

「母さんによろしく」

「ああ、伝えておくよ」

入口前で立ち止まった父が振り返る。

「元気でな」

「親父も」

外の暗闇に父の姿が消える。扉が閉まると、振動でベルが鳴った。それと同時に視界が徐々にぼやけ始めた。

「洋二君」

目を覚ますと恵子さんたちが私を見下ろしていた。体を起こすと、テーブル席の椅子で寝ていたらしい。

「トイレから出てきた後、そこで寝ちゃってたけど、大丈夫？」

恵子さんがおしぼりを渡してくれる。

「今、夢の中で親父に会いました」

「えっ？ 永井さんに？」

「ええ、そこの席に座って話しました」

夢で父が座っていた席を指す。

「あそこの席、永井さんがよく座ってた席だわ。もしかしたら、洋二君は本当にお父さんに会ったのかもね」

まだ少しだけ頭がふらふらする。でも、気持ちの良い酔い具合だ。

「恵子さん」

「何？」

「こつちに帰ってきた時、また遊びに来ても良いですか？」

恵子さんが笑顔になる。

「ありがとうございます。でもね、実はこのお店、今日が最後なの」

「えっ？」

「この商店街も昔みたいないな活気が無くなったし、建物の老朽化とかもあるし、なかなか続けていくのが難しいの。ごめんね」

「そうだったんですか…」

「でも、最終日に昔から付き合ひのある色んな人が会いに来てくれて、最後にはこうやって洋二君にも会えたから大満足よ」

「親父も来たかもしれないですし」

「まあ、まぼろしかもしれないけどね」

恵子さんが笑う。私も釣られて笑い、横さんと喜美さんも笑った。

外に出ると酔っているせいか、あまり寒さを感じなかった。

「ありがとうございます」

「こちらこそ、私も最後にいい思い出が出来たわ」

「洋二君、元気だな。わしと喜美ちゃんはもう少しだけ飲んでいくから」

恵子さんの隣で横さんと喜美さんが手を振ってくれる。

「はい、みなさんもお元気で」

商店街の通り沿いまで来て、振り返ると恵子さんたちはまだ手を振っていた。私も手を振り返した。

「スナックまぼろし」は営業していた。だが、数時間もすれば幻となる。

静まり返った商店街をゆっくり歩く。ポケットの中でマツチ箱が心地よく揺れている。